

5/30 北京へ。

中国を初めて訪れた。

水谷慶一先生が企画された、仏教探訪の旅であった。

愚妻共に古希の坂を越え、やがて行く先の、西方浄土。

そこが如何なる処か？

その準備と言う訳ではないが、心構えとしてでもないが・・・。

そう言う事を、漠然と感じる時が来たとも言うのか・・・。

この企画を知った時、一も二もなく「行こう！」と決めた。

今までの、物見遊山の旅とは、一味違うだろうと期待して。

愚妻は当初、中国だけは行きたくないといぼしていた。

何故か？

彼の国は、今だ未開の地が多くあり、トイレ事情が恐怖だと言う。

ただそれだけである・・・単純そのもの。

アンチ中国の彼女、近年目覚まし発展を遂げた中国を知る由もない。

この先の人生を見つめるには、仏教の原点を知るべしと説く。

ドアの無いトイレは昔の話だ。

いやいや、トイレにドアの無い時代の、おおらかさも知るべし。

たかがドアの無いトイレ如きで、悠久の歴史を知らずして何とする。

たかが一枚の板きれドアにこだわり、壮大な文化遺産を見ずして何とする。

その時代にも、素晴らしい人達の居た事も知るべし。

己の小ささも知るべし・・・e t c。

事によれば、西方浄土のトイレの有り様も知ることが出来るかも・・・？

様々な意味不明の理屈を羅列して説得。

5月30日、午前4時30分、美谷添夫妻と白鳥を出発。

名鉄笠松駅付近の駐車場に車を入れて、名鉄でセントレアへ約1時間。

セントレア空港で、初対面の川瀬さんと合流。

9時20分、中部組5人は、一

路北京に向け飛び立つ。

飛行機はチャイナ航空。

機内のアナウンスは中国語、英語のみ。

名古屋を飛び立つ飛行機だぞ！何故日本語のアナウンスがないのだ！

見たところ、半分以上の乗客が日本人だ。

中国は意識的に、日本を見下そうと、馬鹿にしている。

ならば、ANAやJALは中国語のアナウンスを止めろ！と言いたい。



己の語学力の無さを恥じもせず、愚痴が先立つ寅次郎の旅立ち。

加えて、我が座席は壊れていた。

後ろにもたれると、自然にリグライニングになる。

何度となく、スチュワーデスが来て、直して行くが、またすぐに倒れる。

きれいなスチュワーデスが、何度目かに拙者をにらんで行った。

スチュワーデスは、からかわれていると思ったに違いない。

言葉の出ない愚生は、言い訳も出来ない。

こんなおんぼろ飛行機に乗せやがって、おまけに、にらみつけるたゝ何事だ！

「社長を呼んでこい！」と言いたいところだ。

でも美人ににらまれるのも、まんざらではなかった。

それに、すぐにリグライニングになるから、楽だった。

ありがとう、エアチャイナ！

時差1時間。

機内食は「フィッシュ or チキン？」と聞いてきた。

「フィッシュプリーズ」と言えば、中身はうなぎ弁当！ピンポン！

今、日本はうなぎが、うなぎ昇りの高騰・・・味はますますだった。

野菜サラダのドレッシングは日本製、バターはニュージーランド製。

パンもまんじゅうも日本製だろう。

それでいて、箸がなく、ナイフとフォークだ。

日本無視の不満は残るが、ウナギの味でそれも一時忘れた。

左の席の40代の男性は日本人で、鉄筋コンクリート構造の参考書を読んでいた。

顔色は日焼けしていて、現場に出るシビルエンジニアに間違いないとにらんだ。

同じエンジニアとして、声をかけようとしたが、書物を盗み見したようで、出来なかった。

この辺が今一、社交性に欠ける寅次郎でござんす。

約2時間半のフライトで、中国大陸が眼下に迫った。

第一印象、緑がない！山がない！

荒涼とした茶色の大地だ。

これでは、今もトイレにドアはナイかもしれない・・・？

これが、女房殿の第一印象であつたらしい。

だが、北京空港に降りた時点で、トイレへの思いは杞憂だった。

“杞憂”～昔中国、杞の国の人が、天が崩れ落ちてこないかと憂いたと言う事から。彼女の頭は常に杞憂で満杯だが、空港の設



備を見て、少し元気が出てきた様だ。  
北京の第二印象は、交通事情が極めて悪い。  
車の大洪水だ。  
クラクションは頻繁に鳴らし合う。  
右側通行であり、前を見ているとハラハラの連続だ。  
北京市内を走るのに、かなりの規制があるらしい。



曜日毎に、車のナンバー末尾の数字により通行が規制されるらしい。  
この日は、末尾ナンバー5と0が走ってはいけない日であった。  
しかし、中には走っているのがいたが、見つかると罰金200元との事。  
それに今一つは、ナンバープレートの値段を高くして買えない様にしている。  
現在は日本円で60万円位すると言う。  
上海では80万円とも。  
この洪水の中で、我々はとても運転出来ない。  
中国での自動車運転は、度胸がないと出来ない、とガイドが言う。  
そのせいか、女性ドライバーはほとんど見かけなかった。  
急速な近代化が産む、大きなひずみである。  
ホテルにチェックインの後、北京探訪に繰り出した。  
ホテル名は北京市の珀麗酒店／ROSEDALA HOTELS & SUITES BEIJING。★★★★。  
酒店と言うから、酒屋と宿屋がくっついているのかと・・・恥ずかしい。  
現地ガイド、張さんに縋てを託した。  
まずは、名高き、天安門広場。  
日本で言えば、皇居と国会議事堂が一緒にあるような所。  
人民大講堂へは近く、ソ連のプーチンが訪れるらしい。  
一度内部が見てみたいと思ったが、これは無理。  
地下道をくぐり、毛沢東の肖像を見て、天安門の裏に出る。



そこに午門があり、ここからが故宮となる。正式には故宮博物院、南から入り、北に抜ける一方通行で歩きやすく、すっきり感。

故宮とは1400年代から作り始めた皇帝の住まいと政治をやる所。正式には紫禁城、世界遺産である。“禁城”とは、庶民が近づく事を禁じた城とのこと。

明皇帝が1421年、都を南京から北京に移し、1911年ラストエンペラー愛新覚羅溥儀まで続き、清朝は滅亡。その後、1924年まで溥儀は住み続ける。

翌年退去したのを機に「いにしへの宮殿」と言う事で故宮と命名した由。第二次世界大戦が激化する頃、財宝の主要なモノを台湾へ移した。

これが“台北故宮博物院”であり、10年ほど前に見てきた。

愚考では、建物は北京、財宝は台北と言う感じがした。

張 ガイド

高さ10mの壁に囲まれ、南北960m、東西760mで72万m<sup>2</sup>と言う。

日本の皇居が22万m<sup>2</sup>と言うから、勝てない。

様々な建物が左右対称に建てられている。

“天子は南面す”と言う事で総て、南向きに建てられている。

不思議な事に、この広大な広場に樹木はゼロ、緑がない。

樹木は人を隠すと云う理由で植えなかったと、張ガイド。

どの建物でも屋根には“走獸”と言う獣が魔除けとして飾られている。

建物の格式のよりその数が決められていて、7頭~10頭ある。

気になるトイレを探したら「卫生间」と表示してあった。

真ん中あたりに大和殿と言う故宮最大の建物がある。

宮廷の重要な儀式が行われた所で前が大広場となっている。

真ん中、東西に川が流れているが、弓の形に作られている。

そして中央の道が、矢の意味をなして、南に放たれる仕組み。

階段を上った右端に、日時計があった。

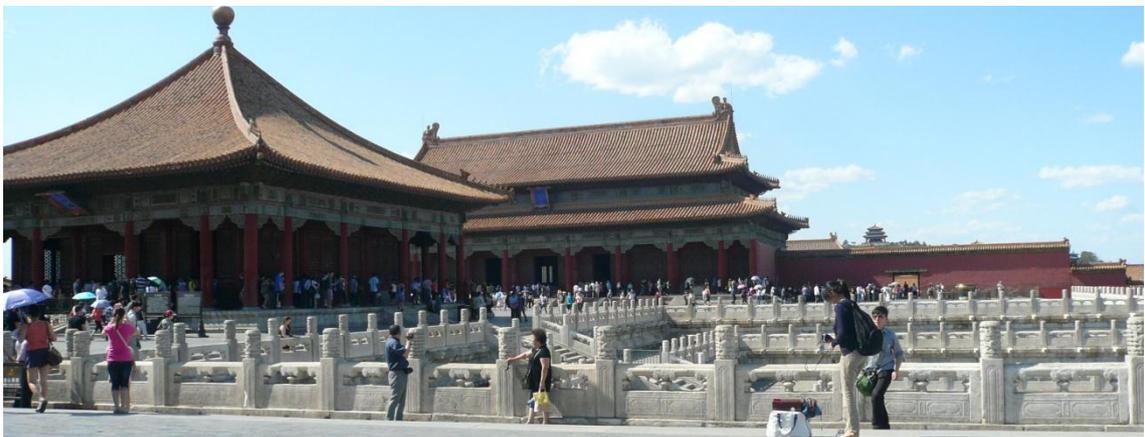
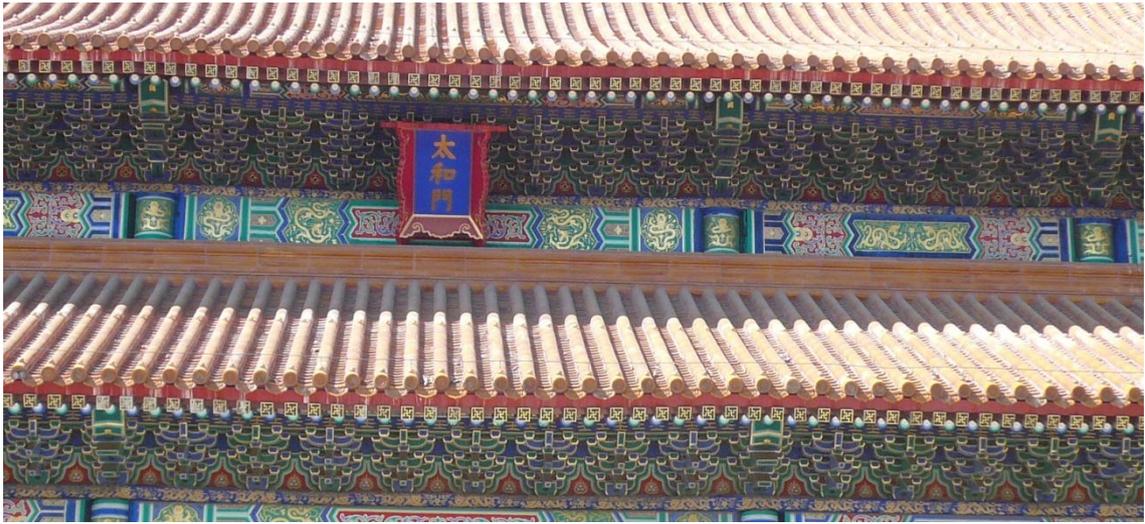
この時代、すでに時間管理がなされていた証拠か？

更に北に進むと、乾清宮があり“正大光明”の額が掲げてあった。

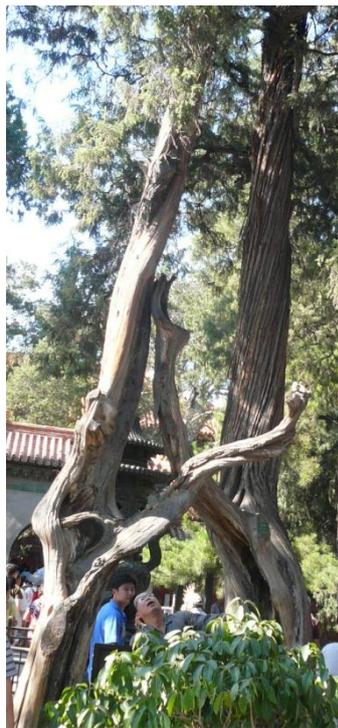
ここは政務を司る処で、日本流に言えば“公明正大”の意味。

この文字は、その後見学する寺院の随所で見られた。





狛犬は、随所で見られたが、これは日本と同じ形だ。  
右の雄は珠を押さえ、左のメスは子供を押さえている。  
今回は、建物を見るのが精一杯で、中の宝物は見られなかった。  
ここを抜けると小高い丘を中心に“景山園”と言う公園。  
ここには緑が豊富にある。  
中央に、二本の木があり、これが絡み合っている。  
“連理柏”言われ、柏の木で、縁結びの木として、ペアスポット。  
その奥に、堆秀山と言う太湖石を積み上げた人口の山がある。  
この太湖石、当時は金に相当する値段がしたと、張さんが言う。  
その上に楼を建て、美女をはべらせ、酒を飲んだと言うからうらやましい。  
階段を15分くらいかけて登ると、山頂に万春亭がある。  
ここら、南方に故宮全体が見渡せて、壮観、絶景である。  
風水では、魔物は北から攻めてくると言われる。  
依ってこの山は、故宮を守るために、人工で作られたらしい。  
最初にガイドが、天安門&故宮半日コースで、一人¥5,000と言う。  
少し高いかな？と感じたが、見終わってみて充分であった、満足、満足。



夜は関東組、関西組と合流して、ホテルの外での夕食。

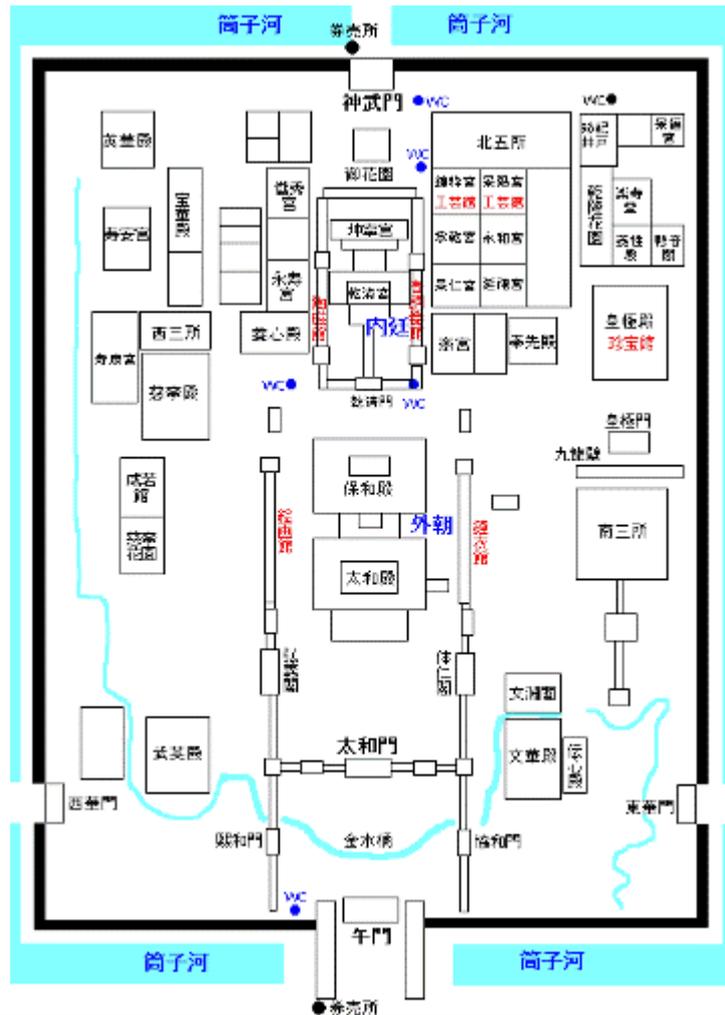
今回の専属スルーガイド、

成勇良氏が挨拶。

彼は水谷先生の旅行を過去に何回も企画した人とかで、大安心。40歳台であろうか、日本語も滑らかで、実に行動的である。その後、折角だからと、夜の北京と天安門を車窓から見物。

昼間は人があふれかえっているが、夜はライトアップされ、趣が違ふ。何か別の所へ来た感じがする。北京市内は、ネオンサインの様な、線のライトアップが目立つ。電力は如何にも豊富と言う感じ。

ホテルの出入り口には、ドアボーイがいるけれど、何の挨拶もしないのが不思議である。彼らは公務員なのだろうか？



夜の天安門

21時頃、ホテルに落ち着く。

寅次郎は今回の旅で、自分だけの、おまけの目的があった。

それは我がブログ“寅次郎の徒然草”を、海外からリアルタイムで更新する事だった。

その日撮影した100枚前後の写真から、文章に合う数枚を選ぶ作業から始まる。

それを見ながら文章を書きあげてゆく。

夕食には、美味しいビールと汾酒を頂き、それが効いてくる。

疲れと相まって、思考が鈍り、瞼が重くなってくる。

これを1~2時間で終わらせないと、午前様になってしまう。

あれも書きたい、これも載せたいとなると、迷う時間が多くなり進まない。

この作業が余分で、かなりの苦行であった事は事実である。

でも、初日の晩、エンターキーを押して、己のホームページ画面が出てきた時は、何ともうれしかった。

加えて、インターネットと言う奴は、世界を飛び回るモノだと、この目で確認が出来た。

古希過ぎのジジィが、単独で目的を成し遂げた。

・・・中国の初夜、一人、成功（性交じゃないよ）のうれしさ・・・？

・・・後は熟睡！



北京 珀麗酒店  
(ローズディルホテルスイツ)  
ROOM NO、1509





屋根の先端に飾る、大事な魔除け“走獣”の掲載を忘れました。